

介護演劇「家で暮らしたい」上演記

今回の特集テーマは在宅療養。いかがでしたでしょうか。まだまだ具体的には分からぬといふ人がほとんどでしよう。多くの人たちが、家族に何かが起きてみると、介護や福祉のことを考えたりはしないもの。でも、何ともいううちに考えておくこと、知ることが必要だよね、ということで、いわき市では、自宅介護をテーマにした「演劇」を制作・上演し、在宅医療の「いろは」を知つてもらおうという取り組みを始めました。

制作・上演しているのは、いわき市内の劇団、ではありません。なんと、いわき市で在宅医療に関わる「平在宅療養多職種連携の会」の皆さんがあ自分

で作り、自分たちで役者になつて、それを上演しているのです。先日、その第1回公演が、草野公民館で年に3回開催されている「たつしやか草野」というつどいの会で上演されました。劇のタイトルは『家で暮らしたい』です。

劇の中身は、医者、ケアマネ、薬剤師、理学療法士らプロフェッショナルが自らと同じ職業の役柄を演じ、脳梗塞でリハビリが必要になった架空の旦那さんと、夫を介護する奥さんの2人を様々に支えるというもの。奥さん役は、地域包括支援センターの職員、緑川しのぶさん。夫役は、実際に草野で暮らす民生委員の佐久間さんを起用。夫が脳梗塞で倒れ、リハビリを余儀なくされ

るという設定で物語が始まり、様々なプロフェッショナルたちからアドバイスを受けていきます。

この劇が面白いのは、劇に登場するプロフェッショナルが、実際にその役柄と同じ仕事をしているという点。劇団員でもなんでもない、医療福祉、介護の当事者が「劇」をやつてしまつているんです。悩める夫婦に対するアドバイスは、実際の現場でも行われていることなので説得力がありますし、コメントひとつひとつが実に専門的です。

最初は大変だった夫婦も、専門家のアドバイスを受け、最後は、杖をつぎながら地域社会に復帰していきます。劇の途中途中で、現役医師のアドバイスもあるため、この劇を見た人は、劇を通じて脳梗塞の危険性や、それを防ぐための食事、いざなつてしまつたときの対応や、在宅でリハビリしていくために何が必要なのかを、しっかりと学ぶことができます。劇の終わりには、リハビリ体操や質問コーナーも設けられていて、頭と身体を目一杯使つた、充実した時間になつたようです。

今回、大好評で幕を閉じた劇『家で暮らしたい』。ゆくゆくはアリオスの大劇場でという野望もある様子。平在宅療養多職種連携の会の「劇団」としての活動から、今後も目が離せません！



緑川しのぶさん・佐久間さん

感動のグランドファイナーレ

取材・文 小松理虔

igoku Fes 2018

史上初！ 地域包括ケアの祭典をアリオスで開催！



紙の「igoku」でも、webサイト「igoku」でも、ご自身やご家族が、今、介護状態などの「当事者」だけでなく、「まだ先のことだよね」と思っている方々にも、手に取ってもらい、見て、読んで、そして、（ちょっと）考えてもらいたいという思いで、取材し、写真を撮り、文を書き、デザインして、届けようとしています。

日々、このいわきの各地で起きている様々な取り組みや“いごき（動き）”は、紙媒体やwebで、“間接的に”お伝えしていくますが、年に一度は、みんなで集まって、“直接的に”体験しませんか？「igoku」でお伝えしてきた、あの人に会えるかも。あのおばちゃんの味が食べられるかも。「認知症」「介護」「家で死ぬ」？ そんなことも、難しく勉強するんじゃなく、泣いたり、笑ったり、自分がやってみたりしながら、考えたり、感じたりする一日。それが、『igoku Fes 2018』です。

元気な人、素敵な団体、オモロイ取り組みを紹介します。家で暮らし、家で死ぬということを、即興演劇集団6-dim+（ロクディム）

が、抱腹絶倒の劇で。生きること、それも健康に笑いながら生きることを、ご存じケーシー高峰師匠が漫談で。その他にも、コンテンツてんこ盛りです。楽しみながら、体験し、「生」と「死」をちょっとだけ考え、大事な人と話し合う機会になれば。

igoku Fes 2018、ご家族・ご友人お誘い合わせの上、是非お越しください！

文・猪狩 僖（igoku Fes 統括プロデューサー）

igoku Fes 2018

いわき芸術文化交流館アリオス

2018年2月3日(土) 11:00 - 15:30 入場無料

中劇場でのigoku表彰式やケーシー高峰師匠による舞台公演（整理券要）、中リハーサル室での「YEAH!撮影会」、カンティーネでの「つどいの場グルメ」のほか、入館体験コーナーなど盛りだくさん！

出演 / ケーシー高峰、即興演劇集団6-dim+（ロクディム）、オナハマリックパンチラインほか

お問い合わせ いわき市 地域包括ケア推進課 0246-22-1202

ほら！よばれでござな！

つどいメシ選手権

北二区集会所 好間地区



大鍋で仕込まれたカレー。トッピングが鮮やか。この香り、このうまさ、届けたい。取材班にはメガ盛が振る舞われた。内心『こんなに食えるか!』と思ったが、なんとペロリ。人生で初めてメガ盛を完食した!

北二区集会所 好間地区

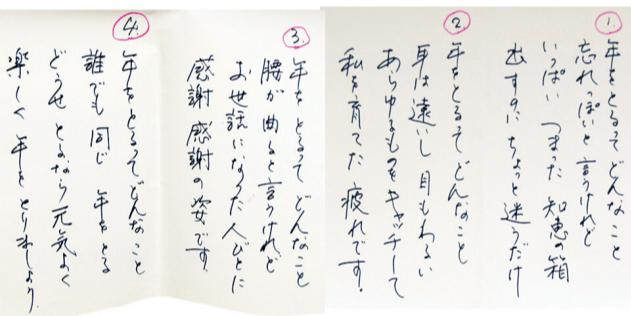


自家製の甘く漬けられた梅干しと、前日から水戻しした天草で作られた寒天。梅干しがやたら美味かったので、なにで漬けたのか尋ねると「う~ん、忘れた」。もう二度と再現できない味と出会ってしまった。

下三坂集会所 三和地区



参加された皆さん、各々自分の畑で育てた野菜を持ち寄って作られたオールスター味噌汁。もちろんお味噌も持ち寄られた自家製のもの。どれ、いただきます。出来たてをズズッと。ハア～、うめえ～。



採取場所・川平集会所

パンチライン採取のコーナー

映画や漫画の面白い点は体験を共有できるということです。家族や友人と集まって、自分が登場人物だつたらこうするとか、作者の意図はどこにあるのか、といった話をするのは楽しいものです。僕がこれまで携わってきた介護という仕事も、まるで映画を語り合うように人生や将来の夢を語りながら楽しくできたらと思いますが、ひとりひとりの切実な生活がある中でその難

しさを感じています。しかしきストーリーの結末だけを知つてその作品を観たことはならないよう、介護も福祉も大切なのは結果や目的ではありません。支援を受けている間も、支援をしている間もひとりひとりの切実な生活の一部だからです。

今回は介護士のバイブル「ヘルプマン！」（講談社）から11巻、12巻を紹介したいと思います。ある日気づいた違和感、すれ違う会話、夢と現実が交錯する世界で、まさか自分が：という恐怖に追われる主人公。認知症当事者を体験できる貴重な一作です。是非ご一読下さい。

文 早坂攝（フクシノワ）



『ヘルプマン! (11巻、12巻)』くさか里樹／講談社

編集後記

「人は『死』を意識すると、パフォーマンスが向上する」これはアメリカのスポーツ心理学誌『journal of sport and exercise psychology』に掲載された研究結果です。バスケットの試合前に「いずれは誰もが死を迎えること」をほのめかされた選手は、そうでない選手よりもシュートの成功率が段違いに高かったというものです。

igokuマガジンの記念すべき創刊号、巻頭の特集は最期の迎え方。自分が死ぬときにどこでどのように最期を迎えたいか考える。それはタブーでも縁起が悪いことでもなく、今を充実させて生きるために必要な事だと取材を通して確信しました。後半は老いの魅力をポートレートで表現しました。

発行にあたりご協力下さったみなさまに、改めてお礼申し上げます。これからもいわきで生ききって最期を迎えるみなさまに心を尽くせるよう、努力と企みを重ねていきます。乞うご期待!!!!(わ)

igoku 編集部

編集長 猪狩僚
ディレクター 渡邊陽一
エディター 小松理慶
デザイナー 高木市之助

紙の「igoku」創刊号 2017年12月1日発行
発行 いわき市 地域包括ケア推進課
印刷 株式会社 植田印刷所

webの igoku
www.igoku.jp
[Facebook](https://www.facebook.com/igokukiryu/) いわきの地域包括ケア「いごく」

igokuのwebサイトでは、いわき市各地の「つどいの場」を紹介しています。また、素敵な方々へのインタビューや、市内での取り組みなどの情報を発信中。ぜひ覗いてみてください。Facebookも開設しています。



古いの魅力

The charm of old age

「学び続ける者はいつまでも若い。人生で一番大切なことは、
若い精神を持ち続けることだ」(ヘンリー・フォード)。
第一線の表現で、古いの魅力を追いました。

写真／丹 英直 スタイリング／茅野友希



丹 英直 Hidenao Tan

広告制作会社勤務後、パリ・ニューヨーク
で写真家に師事、そして独立。10年滞在後
帰国。雑誌や広告などで活躍中。
趣味はオートバイ、釣り。



茅野 友希 Yuki Chino

SLUNDREトップスタイリスト。業界紙や
ファッション誌(ar、ViVi、InRed、CUTiE、
CHOKi CHOKi、Zipper、Soup、mina、
mini、他)のヘア企画に携わる。



片寄 清次 Seiji Katayose

いわき市勿来町生まれ。菓子職人。「菓匠 梅月」店主。久之浜・大久地域づくり協議会初代会長。菓子職人として日々ものづくりに励む傍ら、地域の歴史や文化から地域をつくる活動を長年続けてきた。